

第9回高校生カンボジアスタディツアー

ニュースレター

秋田県立秋田高等学校 Momoka T.

【はじめに】

カンボジアという国は、私にとって発展途上国であるという漠然としたイメージしかありませんでした。しかし調べていくうちに、ポル・ポト政権による大量虐殺や、現在も続く教育の課題の存在を知りました。これらは遠い昔の歴史ではなく、今を生きる人々の現実です。ニュースや本から知るカンボジアの現状は断片的であり、そのように知識を得るだけでは現地の人々の生活や歴史の背景を完全に理解したとは言い切れません。私は、「知る」だけでなく、「自分の目を見て、考え、行動したい」と思い、このツアーへの応募を決意しました。現地での学びを通して、特に教育・医療・平和の三分野は、カンボジアの未来を考える上で不可欠な柱だと考えました。この三つのテーマを軸に、自分が見聞きしたこと、感じたことを報告します。

【教育 ～寺子屋を訪れて～】

私たちはシュムリアップ北部のチュブタトラウ寺子屋を訪れました。バスを降りた瞬間、子どもたちの活気あふれる声が耳に飛び込み、その学習意欲の高さに早くも圧倒されました。寺子屋の中に入ると、三人がけのテーブルに子供たちがみっちり並び、それぞれが与えられた計算式をノートに書き込み、一生懸命ペンを走らせていました。得意げな笑顔で私にノートを見せてくれる子もいて、言語の壁はあるものの、子供たちの眼差しや表情から想いが伝わってきました。

レクリエーションでは、折り紙とジェスチャーゲームを行いました。折り紙では、手裏剣と風船を作りました。最初は上手く折り方を伝えられるのか不安がありましたが、子どもたちが何とか理解しようとしてくれたおかげで、やり遂げることができました。子どもたちは習得が早く、完成した子が戸惑っている子に優しく教えてあげる姿も見られ、その思いやりが心が温まりました。

ジェスチャーゲームでは、ガイドさんに通訳をしてもらいながらルール説明を行い、全身を使って楽しみました。私たちも子供たちに混ざってプレーし、言語の壁を越えた先にある喜びを共に味わうことができました。

その後、寺子屋に通う一人の女の子の自宅を訪問しました。寺子屋から車でおよそ45分。道は未舗装で、赤土のこぼこ道が延々と続き、周囲にはテレビで見たジャングルのような景色が広がっていました。この道を自転車で通うのは相当大変だろうと感じましたが、その女の子は「勉強したい」という一心で通っているそうです。

私はそこで、日本では当たり前に思っていた「教育を受けられる環境」がどれほど貴重なのかということを感じました。寺子屋には家庭の経済状況や家業の手伝いのために、学校を一度辞めざるを得なかった子供たちが多くいます。教育は単なる知識の習得ではなく、自分の未来を描くための力であることを改めて実感しました。寺子屋は、そういった子供たちに第二のチャンスを与える、カンボジアにとってなくてはならない存在だと強く感じました。



寺子屋の授業の様子。皆一生懸命勉強していた。



寺子屋の子どもたちと記念写真

【医療 ―アンコール小児病院を訪れて―】

シェムリアップ市内にあるアンコール小児病院は、国内外からの寄付による年間 550 万ドルの資金によって運営されており、毎日約 350 人の診療を行っているそうです。

特に印象的だったのは、病室の名前です。非識字者にも分かるよう、1 号室や 2 号室といった数字ではなく、バナナやパイアの絵で区別されていました。こうした工夫からも、非識字者が身近に存在している現実を実感しました。また、病院内には赤ちゃんの離乳食を確保するための畑があり、育てた作物を調理するためのキッチンも整備されていました。さらに、お母さんの産後ケアをする「Mother room」という部屋が用意されていたり、子どもの栄養指導を行ったりする仕組みなども備えられていました。日本では、少し歩けばスーパーマーケットやコンビニで食材や粉ミルク、保存可能な離乳食を簡単に手に入れることができます。しかし、それは決して当たり前ではありません。カンボジアでは、出生後に十分な栄養を摂ることができないなどの理由で、1000 人中 13 人の子どもが生後一ヶ月以内に亡くなってしまうそうです。この厳しい現実を知り、私は日本の医療環境のありがたさと同時に、国際的な医療格差の大きさを感じました。

さらに、この病院では医療従事者の育成にも力を入れており、毎年多額の投資を行って研修や教育を実施しているそうです。国内の人材だけでなく、海外からのインターナショナル・スチューデントも受け入れ、国境を越えて学び合える環境を整えていることも印象的でした。



病院内にある野菜畑



病院内のキッチンで離乳食を作っている様子

【平和 一負の歴史から学ぶー】

カンボジアの歴史を学ぶため、トゥールスレン虐殺博物館（S21 収容所）とキリングフィールドを訪れました。両施設はカンボジアの負の遺産として、2025 年 7 月 11 日に世界遺産への登録がユネスコにより正式決定されたばかりで、今回の訪問はそういった意味でも、貴重な体験となりました。ポル・ポト政権下の 1975～1979 年で起きた大虐殺では、国民の 4 分の 1 にあたる約 200 万人の尊い命が失われてしまいました。

博物館には、犠牲となった人々の写真や遺品、当時使われた拷問器具が展示されていました。一步足を踏み入れた瞬間、異様な雰囲気漂っているのを感じました。もともと高校の校舎であったトゥールスレン虐殺博物館（S21 収容所）で拷問が行われたことから、ポル・ポトがいかに教育を否定したかったかが伝わってきました。一つひとつの部屋には排泄物を入れるための壺と、パイプベッドが当時のまま残されており、その生々しさに言葉を失いました。収容された人々は人として扱われず、番号を割り振られて管理され、残酷な拷問を受け、処刑場へと連れて行かれ亡くなっていきました。写真の中の、絶望の中で光を失った表情、まだ生きたいと必死に訴える目。被害者一人ひとりの想いがその眼差しから伝わり、胸が張り裂ける想いでした。

キリングフィールドはその名の通り、処刑場です。子どもも大人も関係なく、「雑草を抜くときは根まで引き抜け」という指示のもと、5 万人もの人々が処刑されていきました。キリングツリーと呼ばれる木の周りでは、子どもの頭部を打ち付けて殺害したことから、ぬいぐるみやブレスレットなどが供えられており、亡くなった子どもたちの無念さに胸が痛みました。慰霊塔に近づいていくと、ガラスの奥に数えきれないほどの頭蓋骨が積み上げられていることに気がつきました。事前の調査で慰霊塔の存在は知っていたものの、実際に目にした時の衝撃は決して忘れられません。

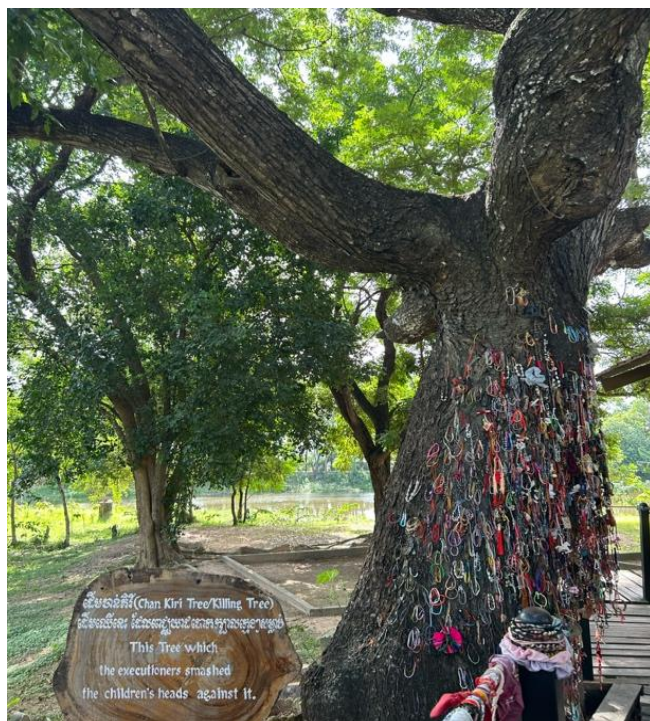
ポル・ポトは、全ての国民が農業だけに従事すれば格差も生まれず、平等で平和な社会を作れると考え、それに反対する多くの知識人を殺害しました。メガネをかけているから、カレンダーが読めるからという理由で命を奪われた人も多くいるそうです。

展示室を歩く中で、被害者一人ひとりが、遠い昔の歴史的人物ではなく、約 50 年前まで「生きていた人間」であったことを強く感じました。キリングフィールドでは今もなお、雨が降ると土の中から遺骨が出てくるといいます。

日本で平和な日常を送る私には想像しきれない苦しみが、この国の歴史には刻まれていることを実感するとともに、そこから立ち上がり、未来に向けて歩もうとする人々の強さも感じました。その一方で、寺子屋に通う子どもたちのような世代が、この悲惨な歴史を理解しているのか、疑問に思いました。絶対に風化させてはならないこの歴史をどのように紡いでいくかが今後のカンボジアの課題だと感じました。



たくさんの頭蓋骨が安置される慰霊塔



キリングツリー

【おわりに】

ここまで述べてきたことは、今回のスタディツアーで私が学んだことのほんの一部にすぎません。これまで、ポル・ポト政権によって失われたカンボジアの教育基盤や医療体制、そして悲惨な過去と平和への展望を中心にお話ししてきましたが、もちろん前向きな出来事も沢山ありました。日本国大使館や UNESCO プノンペン事務所への表敬訪問では、現地で活躍されている方々から貴重なお話を直接伺うことができました。日本がカンボジアに地雷撤去の技術を伝えたことで、カンボジアはその技術を習得し、今ではウクライナの地雷撤去を支援する側として動き出しているそうです。日本の支援の成果が形

となって現れていることに、深く感動しました。また、JICA の支援によって上下水道が整備され、現在ではそれを自ら維持できるようになっているという点から、日本との深い結びつきも実感しました。これらは確かな進歩の証だと思います。

今回の訪問前、私の中でカンボジアは発展途上国という一括りのイメージでした。しかし、実際に自分の目で見て、耳で聞き、多くのことを学んだことで、その考えは変わりました。国にはそれぞれの歴史や物語があり、着実に成長し続けているのです。だからこそ、それぞれの国の現状をもっと知る必要があると思いました。

世界には発展途上国と呼ばれる国がまだまだたくさんあります。将来、私が大人になる頃にはそれらの国々が現状から抜け出せることを願いつつ、自ら様々な国に実際に訪れることを目標に、日々努力を重ねていきます。この大切な経験を糧に、私は国際機関で働くという夢の実現に向け、これからも歩みを進めていきます。

そして何よりも、大切な仲間に出会えたこと、将来の夢や自分のビジョンについて真剣に語り合ったことも思い出です。全国各地から集まったこの 10 人だからこそ、お互いの良さを認め合い、共に成長することができました。この出会いは、私にとってかけがえのない宝物です。

最後になりますが、このような貴重な機会を与えてくださった公益社団法人日本ユネスコ協会連盟及び公益財団法人かめり財団の皆様をはじめ、現地の方々、カンボジスタディーツアーに関わってくださったすべてのの方々、そして共に学んだ仲間に、心より感謝申し上げます。